

13. 歯牙腫を伴った乳歯濾胞性歯嚢胞の1例(第9回東日本学園大学口腔外科研究会)

著者名(日)	富永 恭弘
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	11
号	1
ページ	136
発行年	1992-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00007738/

口腔内所見で、下唇右側、上唇右側、赤唇粘膜移行部から口腔底部にかけて、び慢性で圧痛のない半球状の腫脹を認めた。臨床診断：クインケの浮腫の疑い。処置およ

び経過：特に痛み等ないので、経過観察すると、約3日で腫脹は消失した。

13. 歯牙腫を伴った乳歯濾胞性歯嚢胞の1例

口腔外科学第二講座

富永 恭弘

濾胞性歯嚢胞はその多くが永久歯に由来し、乳歯に発生するのは稀である。今回我々は、乳歯に発生し嚢胞壁内に歯牙腫を伴った濾胞性歯嚢胞を経験したのでその概要を報告した。

患者は3歳男児で、2歳6カ月頃E₁を除く全ての乳歯の萌出は完了したが、3歳になってもE₁の萌出を認めないため、平成3年2月、E₁の萌出遅延のため某歯科より紹介され本学を受診した。萌出遅延以外の自覚症状はなく、既往歴、家族歴に特記すべき事項はない。口腔内所

見で、E₁を除く全ての乳歯の萌出は完了しており、E₁相当部の被覆粘膜は健康粘膜で、同部に腫脹、圧痛等は認められなかった。X線所見ではE₁は下顎骨体部下縁に近接しており、拇指頭大で境界明瞭なX線透過像で歯冠を囲まれ、その透過像の遠心上部には直径約5mmの不定形の塊状のX線不透過像を認めた。歯根は完成しているが細く短かった。また、5₁、5₂の歯胚は認められなかった。